

太宰府の謎



講演する正木裕氏＝2022年11月29日、奈良市大安寺西1丁目の奈良県立図書情報館

この「吳国」は唐建国時（618）の混亂期に李子通が江南に建国し、619年～621年にしか存在しないから、この記事の実年代は619年～621年で、九州年号「倭京」間にあたる。「旧唐書」は、「歴代中国王朝と交流したのは、光武帝から金印を下賜された倭奴國以来7世紀末まで続く、九州の倭國（九州王朝）」とし、一方、日本国（大和朝廷）はもと小国で、「8世紀初頭に倭國を併合した」とする。

◆「旧唐書」倭國倭國は古の「倭奴國」なり。京師（＊長安）を去ること萬四千里、新羅の東南大海の中に在り、山島に依りて日本國を以つて名と為す。あるいは曰く、倭國自らその名の雅びならざるをいくみ改めて日本と為す。ど。あるいは云う、日本をもと小国にして倭國の地をあわせたり、と。

従つて『旧唐書』によれば、倭國（九州王朝）は、多利思北孤の時代に、俾弥呼・壹興が臣従した西晋代の「太宰」を官名に用い、「太宰府」を開府したことになる。隋の煬帝に対抗し、「日出の処の天子」を自称した多利思北孤は、中国皇帝に倣い、「三公」を置き、列島全域の統治を試みたのだと考えられよう（＊『聖德太子伝記』では端政元年（589）に全国を66国に分国統治したとする。この太子のモデルは『隋書』の多利思北孤だと考えられる）。一方、大和朝廷は律令制において、「太政大臣・左大臣・右大臣」を「三公」に相当する職とし、大宰府を九州島内の統治に限定する「地方

◆推古17年(609)の「筑紫大宰」なかはる年は次の通り、『隋書』にいう倭(倭)國の阿毘多利思北孤(上宮法皇)の時代(～622年)で九州年号の「倭京」年間となる。

檀原市醍醐町にある藤原宮跡を中心とする藤原京は、日本国初の本格的な都城とされる。694年に完成し、来年（2024年）は創都1330年を迎える。再来年（2025年）には、世界遺産登録が期待される。アマチュアの歴史研究家で構成される「古田史学の会（古賀達也代表）」では、藤原京の前に倭国の都城として、太宰府（福岡県太宰府市觀世音寺4丁目）、前期難波宮（大阪市中央区法円坂1丁目）、近江大津京（滋賀県大津市錦織2丁目）が存在したとする。その都城の変遷に関する講演会「太宰府の謎」について昨年、古代大和史研究会（原幸子代表）主催で、奈良市大安寺西1丁目の奈良県立図書情報館で開催された。講演会は2022年11月29日に、大阪府立大学講師で、古田史学の会事務局長を務める正木裕氏が講演した。その要旨を紹介する。

古田史学の会特集

太宰府はいつできたか
中国二戰が國の「太宰

太宰府は倭京元年(618)に

聖徳太子（多利思北孤）の倭京遷都

た世紀前半とする（九州国立博物館（西府）より）。ところが、政庁の瓦は老式で、天智の発願とされる觀世音寺の瓦式との比較上670年代の創建と考えられることを示す文献上の多くの資料もある。『本紀』では「天智期」の発願、「三中歴

都太宰
司2式
老司1
られ、
『続日
では
める。三位以上四町、四位・五位一町など、以
下減少)」をもとに計算すると、養老律令の有
位の中央官僚定員から算出した必要家地は約3
00町、これに対して太宰府駐在官僚(50人)
の方は約11町。しかし、井上泰の太宰府条坊は
「一町90m四方として440町」もある。これ

意味で、此地を帝都とし気近く今百余歳
る」は、此の帝都の地（現在の京）に移つ
がら現在（今）まで百余年親しんできた」こ
を示すものだ。100年前は517年で、磐
か始めた九州年号「繼体元年（517）」に
たる。磐井の王都は岩戸山古墳や『風土記』
筑後（高良山周辺の三瀬や八女付近か）と
えられる。従つて、磐井は517年に中国南
から自立し、独自年号を建て、筑後を「帝都」
と定めた。その後100年を終えた618
(倭京元年)に、太子は北方に「京」を遷し
ことになる。そして、筑後の北方は太宰府の
角にあたるから、この記事は聖徳太子のモデ
多利思北孤の「太宰府遷都」を示すものとい

えル方た年」朝考かあ井と在
これは「白鳳」元年は辛酉（661）で23年
間続き、その「白鳳年間」に觀世音寺が東院
（皇太子）により創建されたという記事。
③「日本帝皇年代記」天智天皇唐高宗咸亨元庚午白鳳十（年）
〔鎮西建立觀音寺、建立禪林寺、俗曰當麻寺。〕
④「勝山記」白鳳十年鎮西觀音寺造
【註】大津宮御宇天皇（＊天智）、奉為後岡本宮御宇天皇（＊明成）、誓願所基也。
〔二中歴〕白鳳23年間（661辛酉～683癸未）「対馬採觀世音寺東院造」

太宰府条坊の規模は
「全国統治の政庁」にあたる（図①）
よつて多利思北孤の太宰府政庁は、2期以
の創建と考えられる。

多利思北孤の太宰府は
「全國統治の政局」

太宰府には「京」に相応しい「条坊」が明らかになつてゐる。その規模につ
①井上信正説「南北22条、左郭12坊・

右郭8

（政）治を始めた」とある。

現在遺跡で残る「太宰府政庁」は2期で
説では1期は7世紀後半、8世紀初頭、2
8世紀初頭、10世紀、3期は10世紀後半

期は通12の計20坊」で、政庁より先行する。(2)「東西各12条、南北22条」とするなどる。井上説の条坊規模と千田稔氏推定「家地授与基準」(*身分により家地の

鏡山猛謹の説が、この律令の
廣さを示す。

この66国分割に照応するように、『書紀』の589年記事には、東山道・東海道・北陸道への使者派遣が記されている。

図①／太宰府条坊および周辺の状況(井上条坊案)

「端政」は「政治の始め・端緒」の意味で即位年に相応しい。多利思北孤は即時と同時に、「畿内（難波）」に進出し、東方統治の拠点としたことになろう。そのころ、隋の煬帝は南西諸島に侵攻し、多数の捕虜を拉致していた。『隋書』（琉球国伝）には、大業4年（608）煬帝が流求に侵攻、宮室を焚き男女数千人を捕虜とし、その際奪取した布甲（布製の鎧の類）を見た倭国の人々が、「夷邪久国人の布甲だ」と述べ、その後倭国との国交が途絶えたところである。多利思北孤の畿内進出や、有明海沿いの筑後から北方筑紫倭京（太宰府）への遷都は、こうした隋の脅威から守るためにあつた。また、「太宰」の任命は、太宰府と畿内・難波という「2拠点制」を実施する上で、多利思北孤の不在時にも支障なく政治を運営するに不可欠だったと考えられる。こうした多利思北孤の九州から畿内難波への「東遷」が、瀬戸内海の史料資料に記されている。

●「平家物語」長門本（平家物語卷第五嚴島次第事）「嚴島大明神と申は旅の神にまします仏法興行のあるじ慈悲第一の明神なり：密教を渡さん謀に皇城をかくとおぼして、九州より寄給へり。その年記は推古天皇の御宇端政五年癸丑（593年九月十三日）」。